

# 特集

## ITコーディネータ表彰事例

～DX 認定企業の輩出を目指してII～

### 2

#### 小さなことをやってみて、その成功がDXの自走につながる

##### －株式会社NISSYO(東京都羽村市)－

###### 「Change or Die」(変化か死か) 変わらなければ死んでしまう

2つ目に紹介する企業は、優秀賞(独立行政法人情報処理推進機構理事長賞)に輝いた株式会社NISSYO。東京都羽村市に1967年に設立された電気機械器具製造業の会社である。

NISSYOは、設立当初は織物業を営んでいたが、当時は東南アジアの安い製品にどんどん押され、織物業自体は徐々に衰退していった。そんな中で同社が注目したのが、電気の電力を変換する「変圧器」だった。

現在もこの変圧器が製品の主力だが、変圧器の周辺事業のほうも順調に業績を伸ばしてきて、現在は売り上げの約40パーセントをこの周辺事業が占めている。

平均年齢は、製造業では極めて若い31歳。そして、従業員240名のうち、約40%にあたる100人近くが外国人という構成になっている。現在は

ベトナム、インドネシアなどの東南アジアからの若い人材が集まっているという。

同社のスローガンは「Change or Die」「Fast eats Slow」。直訳すると「変わらなければ死んでしまう」。

「とにかくスピードが命です。時代の流れを敏感に感じて、それ以上のスピードで変化する会社にしていかなければ、NISSYOはなくなってしまうという意味です」と語るのは、同社の代表取締役社長、久保寛一氏。

そして、DXの戦略の本質もずばり「チェンジ」と「早くやる」だ。

###### 「データドリブン経営」と 「アスヨクDX」でDXを

同社のDX化で最初に取り組んだのは、従業員の意識改革だった。全従業員に売り上げなどの現状のデータを図表で見せて、会社のことを自分事として考えてもらうこと。経営サイドにも立ってもらったことだった。

「このように意識を変えていけば、

人の可能性や夢は無限大に広がります。会社もどんどん伸びていくと考えました」と久保社長は言う。

具体的なDX戦略で、1番始めに掲げたのは「データドリブン経営」。データを基に経営判断をすることと、Plan、Do、Check、ActionというPDCAを素早く回すことを会社の基本にした。そして、もう1つは「アスヨクDX」というクラウド型のポータルサイトを作り、すべてのデータを集約することだった。

2015年にはタブレット55台を配り、久保社長は「これでDX行くよ」と社員に宣言した。

「みんなで使ってみるというのが始まりでした。会社だけで使っても上手にならないから、家に持ち帰ることもOKにしました。社員がYouTubeを見たり、ゲームをしたりして、そのうちうまく使いこなせるようになっていったのです」

その成果はペーパーレス化にも現れた。それまで年間60万枚の紙を印刷していたが、タブレットを業務に使うようになってからは印刷する枚数は激減した。

さらに、2020年にはEDIを導入し、メーカーへの発注や納期調整などを、FAXからWebベースに変えていった。

そして、2021年にはリアルタイムで不良分析ができるBIツールを搭載した「アスヨクDX」を導入。このシステムは、どこで不良が起きたのか、誰にどんなトラブルが起きたのかなどを自動的に分析し、クラウド経由でリアルタイムに図表に表示する。社員全員がタブレットを持っているため、瞬時にそれらの情報を知ることができる。

さらに「アスヨクDX」では、弁当の注文や残業時間の確認なども行うことができ、81歳の社員も毎日利用しているという。

「『大きいことはやらなくていいから。ちっちゃな体験を繰り返して、失敗しながらやっていいんだよ』と社員に言いました。入口がすごく低いので、いつの間にかみんなが使うようになり、システムが社内ですぐ活用されていきました」

やっているうちに楽しさが見えてきて、便利になった実感が湧いてくれば、DXは勝手に走り出すと久保社長は強調する。

###### こちらの思っていることを ずっと出してくれる人

ITコーディネータの中尾克代氏と久保社長の出会いは、2021年11月に青梅商工会議所主催で行われた中小企業のためのビジネスゲームの研修の場だった。青梅地域のものづくりの経営者が20名ほど集まり、中尾氏が講師を務めた。

久保社長はビジネスゲームが始まって30分くらいで、ゲームのポイントが素早く理解し、チーム内でリーダーシップを発揮し始めたという。その研修の場で中尾氏がDX認定の話をする、後日、久保社長から連絡があった。

中尾氏は、ビジョン作成、DX戦略作成、KPI作成、セキュリティアクション、そして申請と、体系的に同社のDX認定を支援。そして、NISSYOは2022年6月にDX認定を取得した。

「中尾さんに教えてもらう前は、DXに対するKPIというのは、何のことなのか、どう表現すればいいのかわからなかったし、そんなことを考えたこともなかった」と久保社長は言う。

そして、「中尾さんは、こちらの思っていることを、ずっと出してくれる人です。そこが一番感覚がいいといつも



思っています。これからも我が社を良くするには、いろいろなことに挑戦したいです。それには、中尾さんのような専門家を大いに利用して、その力を借りながらやっていきたいと思えます」と久保社長は中尾氏を大いに評価している。

一方、中尾氏は、久保社長のDXに対する姿勢をこう語る。

「NISSYOさんのDXの特徴というのは、デジタルツールを上手に使って、戦略的に変革をされているところだと思います。まず久保社長がいろいろなところに行かれて、いろいろな新しい情報やツールを仕入れてくる。そして、タブレットを全社員に提供したように、新しいアイデアをタイミングよく投入する。それによって、ますます早く、そして高いレベルの変革ができる体質になっていると思います。まさにデジタルトランスフォーメーションはかくあるべきかが実践されているのではないかと思います」

そして、「『DXだから、すごいシステムを入れなくてはいけない』と言う社長さんもいます。しかし、そうではなくて、NISSYOさんのようにタブレットを入れたりして、とりあえず目先の小さな改善をする。それからだと思うのです」と同社のDXの歩みを、中小

企業の良い手本であると捉えている。

###### 勉強することが大切 学び続ければ人生は無限

最後に久保社長に、中小企業のDX戦略へのアドバイスを聞いてみた。

「まずはトライして、エラーしてみたらいいんじゃないかと思います。多くの人がDXを大きく考えすぎていて、いきなり大きなハードルを越えようとしているように見受けられます。目の前の小さなことからやってみて、それが実は手段となってDXにつながるのだと思います。」

もう一つは、やっぱり勉強することが大切だと思います。中尾さんもよく言っていますが、学び続ければ人生は無限だと。学びを止めたら終わってしまう。それがDXに限らず、経営者に必要なことだと考えます」

###### 会社概要

株式会社NISSYO  
事業内容: 変圧器、電源装置、半導体製造装置の設計、製造、販売など  
東京都羽村市神明台4-5-17  
<https://www.nissyo.tokyo/>

###### ITコーディネータ

アイティ経営研究所  
代表 中尾克代氏  
<https://www.itbizlab.jp/>



代表取締役社長  
久保寛一氏



ITコーディネータ  
中尾克代氏